

50. 頸椎症性ミエロパチーに対する高気圧酸素療法の検討

吉田恒丸 山崎典郎 田中秀昭
久野宗和 森久保治道 松本眞彦
杉山弘行* 神山喜一**

(東京都立荏原病院整形外科*脳神経外科)
**高圧酸素治療室

【目的】頸椎症，頸部ヘルニア，後縦靭帯骨化症（OPLL）などに起因した脊髄慢性圧迫によるミエロパチーは，ADL上 disabilityの程度により保存的管理が長期にわたることも多い。これら慢性圧迫と循環不全による虚血が関与した病変に対し，脳梗塞などで従来試みてきた高気圧酸素が治療的に応用しうることが推測される。われわれは今回頸椎症性ミエロパチー（OPLLを含む）を中心とした若干の症例に対し，治療の一環に高気圧酸素療法（OHP）の実施を試みたので報告する。

【方法】症例は25例で，これを手術群12例（第1群），術後症候群3例（第2群），保存的治療群10例（第3群）に区分し，OHPはこれら主治療に併用した。OHPは2絶対気圧下，1回純酸素75分吸入で20回1クルールの方式とした。効果判定はADL機能を重視した日本整形外科学会頸椎症例判定基準（17点満点）と，「こわばり」「重ぐるしい」など愁訴の状況を独自に作成した体験感覚指数（8項目で±8点）で評価し比較した。

【結果】1) 日整会基準で第1群は4～9点，第2群は1～3点，第3群は0～3点の向上点があり，改善率は各々39～75%，14～30%，0～50%であった。2) OHP体験で第1群は感覚指数が改善率にほぼ平行して+3～6の向上があり，第2，第3群では改善率にかかわらず+1～6の何らかの改善感覚があった。3) 感覚指数は障害の軽度例で概して高いが，重度例にも+5以上の改善感覚を示す例がある。

以上よりOHPは，いわゆる圧迫性ミエロパチーの病態に対し，阻血の解除やADL機能改善の目的で計画される適切な主治療と併用して実施されるとき，これらに協調して障害に起因する愁訴の軽減と改善感覚の自覚体験がしばしば認められ，臨床的效果を発揮することが推測される。

51. 術後脊髄障害症例のコンピュータによるOHP効果判定プログラムの開発

加藤千春 高橋英世 小林繁夫
早瀬弘之 西山博司 伊藤宏之
末永庸子 土屋秀子 榊原欣作

(名古屋大学医学部附属病院高気圧治療部)

われわれの施設では脊柱手術後の脊髄障害症例に対する高気圧酸素療法（OHP）件数が最近3年間に著しく増加した。しかし従来は一定の効果判定基準がなく，OHPの治療効果の定量的な評価が困難であったので，コンピュータによる治療経過管理プログラムを開発し，この解決を試みた。

コンピュータは大型高気圧治療装置制御のために導入した日本電気PC-9801を使用し，プログラムの言語には，ベーシックを用いて入・出力を行った。ファイル名としては各症例の病歴番号および氏名を使用し，これをディスクに記憶させ，データの索引，追加および訂正を容易とした。また一人当たりのデータが多く，1枚のディスクでは30～40人分しか記憶させられないので患者数が増加しても容易に検索できるよう，システムディスクのメインプログラムで，データディスクの管理を行うこととした。

脊髄障害の症状である四肢の運動機能，神経反射，膀胱直腸機能などのデータは，プログラミングについて検討の結果，判りやすい表またはパネル表示として整理することとしたが，知覚についてはグラフィック画面を用い，人体図上に改善の度合を色別表示することとした。

この管理プログラムによって，それぞれの患者のデータは，常時，容易に検索でき，OHPの効果判定が極めて容易となり，最適な治療条件の決定治療経過中の方針変更，さらに治療終了の時期の決定などを一定の基準にもとづいて行うことが可能となった。換言すればコンピュータの導入によって，治療管理の合理化と治療成績の向上の両者を達成することが可能となった。またこのプログラムはOHP治療を受ける症例のみならず，整形外科領域全般に広く導入可能な汎用性を有するものであると考えている。